徳山大学校友会誌

第9号

昭和63年3月25日

発行所　徳山大学校友会
〒745 山口県徳山市久米
徳山大学学生課内
TEL 0834(28) 0411(代)

発行責任者　豊岡正行
編集発行人　秋本辰己

徳山大学校友会 山口県東部支部結成会並びに 結成記念パーティ開催

昭和63年2月21日(日)、午前11時より徳山市丸福ホテル（ゴールデンの間）に於て、校友会の第三番目の支部として、山口県東部支部の結成式並びに結成記念パーティーが盛大に催された。

校友会の支部誕生は、広島県、関東支部に続く支部結成である。

現在山口県下に、名簿の調査では約千人の卒業生がおり、地元に支部をとの声が高まりつつあった。又、校友会本部組織の一層の充実発展を押し進める上にも、このたび結成されたものである。

結成にあたっては、支部設立準備委員会を設け、箱崎秀彰氏（二期生・徳山市役所勤務）を委員長に結成のお骨折りをいただいた。

結成式は、校友会会長豊岡正行氏の挨拶から始まり、支部結成の目的、校友会の今後の施策について力強く述べられた。

初代支部長の選任については、設立準備委員長の推薦により、古谷幸男氏（七期・徳山市議会議員）が選任され参加者全員の拍手をもって承認された。選任の挨拶に立った古谷氏は、私は、七期生ではあるが強い志を持ち28才で本学へ入学した。卒業後も、校友会組織に対し多くの期待と将来の展望についても深く考えていると挨拶され参加者の力強い拍手が鳴り響いた。

大学当局からは、不破勝敏夫学長を始め、佐原昌弘学生部長、有田稔就職部長、古川清教授、益永忠雄総務部長のご出席を頂き、諸先生方より丁重なるご祝辞をいただいた。祝辞の中で、不破勝学長は、本学のゆるぎない伝統と発展は、卒業生諸氏の社会でのご活躍の基に生まれると励ましの言葉をいただいた。

またこのたびは結成式の中で、記念講演会を開催し、衆議院議員で本学理事でもあります、高村正彦先生の講演をいただいた。講演の中で先生より、支部結成のお祝をいただくと共に、教育改革、国の平和と独立といった政治基本についての貴重なるご講演をいただいた。その後、12時より、記念パーティーに移り約一時間半、支部結成に駆けつけた百名の卒業生諸氏と来賓各位と華やいだ雰囲気の中校友を深めながら盛況裏に幕を閉じた。

最後に、参加した卒業生諸氏の声として、早急に東部支部全員の名簿作成を行い横の繋がりを深め今後もこの様な催しを積極的に開催して行くと同時に、地域社会に貢献し、本学の発展を期する目的で、会員の研究・研修活動、種々後援活動、地域文化への講演会活動等アカデミックな会にすることを誓い合った事をご報告しておく。

今回の結成式は、支部結成のスタートに相応しい盛大な催しであった。

支部長　古谷幸男氏

校友会支部だより

■関東支部

関東支部副支部長
中村厚彦（二期生）

関東の空っ風の中、コートの衿をたて電車を乗り継ぎ一時間以上もかけて通勤する人々、大渋滞をイライラしながら得意先回りをする人々、遠く故郷を離れ息つく暇なく働く人々、この様な人々の一員に校友会会員がいます。

昭和六十一年十月に校友会関東支部が校友会本部・事務局及び大学関係者のご努力により設置され発足することができ誠に感謝に堪えません。

関東支部は東京を中心にした関東圏に在住する校友会会員の相互の連絡と親睦に関する事業を行うと共に母校の発展の一助になることを主な目的としています。

しかし、発足以後活動は低調で目的ははっきりしていますが行動が併っていないのが実状です。〝何もないところから、何かを創り出そう〟開学当時のあの雰囲気、ファイトが思い出されます。

時代はどんどん進み加速している現在、大学の発展と充実ぶりは目をみはるものがあり、五、〇〇〇人を超える卒業生が全国に送り出されていると聞いています。関東圏への流入は他圏よりはるかに多くなることが予想されます。

関東圏を預かる関東支部の役割りは、今後益々重要になってくることを自覚し現状の支部活動を充実させると共に本部と連携を密にし関東圏へ来られる会員のために支部基盤をしっかりしたものにしなければならないと考えています。

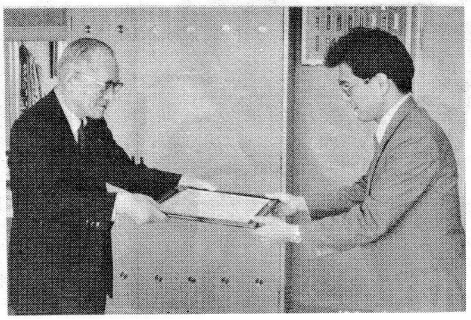
関東におけるオアシス的な支部にするため、校友会会員・本部並びに事務局の絶大なるご援助、ご協力をお願い致します。

■広島支部

広島支部支部長
長谷川　洋（二期生）

皆様　御無沙汰しております。広島支部結成以来、早いもので五年目を迎えました。この間、私事で恐縮ですが離職、再就職と多忙に任せ積極的な支部活動の対応が出来ないまま過ぎてしまいました。

この紙面をかりて深くお詫びします。また、このたび関東支部に続き山口県東部支部が結成されると伺い、校友会の益々の発展に心よりお慶び申しあげます。今後は、三支部一致協力し、支部組織の充実を図りたいと考えます。事務局におかれては、校友会誌を通じ支部活動、OB諸氏のご活躍等、幅広い情報を記載して頂き、校友会員のパイプ的役割を、今後も多いに期待します。



昨年12月、長谷川氏より本学へ百五十冊の図書寄贈がなされ、本年3月10日、不破勝学長より感謝状が授与されたものです。（事務局）

周南支部 結成に当って

支部設立委員長
箱崎秀彰

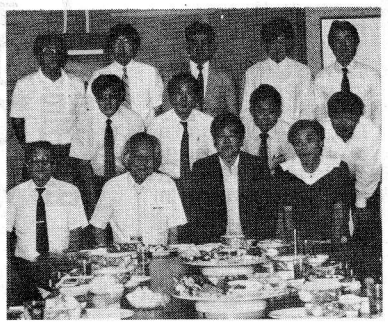
早いもので我が大学もこの春には、五、三〇〇名もの卒業生を社会に送り出すことになります。特に山口県東部においては、一、〇〇〇名を越える卒業生が各方面で活躍されています。しかし、これだけ多数の卒業生を輩出しながら、旧友と再会できる場もなく名刺交換の場もないという声が多く聞かれました。

校友会幹事会もいろいろと活動してまいりましたが、こうした声に沿うべく、支部設立の署名運動を開始することになりました。設立目的は、①卒業生の25％が山口県東部に在住であるが未だ支部が未設定である。②会員相互の連繋並びに親睦を図る。③総会、講演会を開催し、名刺交換の場を設ける。④徳山大学教授陣を迎えて勉強会を開催する。以上の四点です。この署名には、周南地区を中心に66名の賛同者を集めることができ支部設立に向け第一歩を踏み出すことになりました。

そして、六十二年十一月の校友会幹事会において、設立準備委員会をもうけて準備することが決まり、6名で進めてまいりました。

準備委員会では「徳山大学校友会支部に関する内規（第五条）に基ずき支部規定の作成及び内規にそった支部長の人選を進め、支部長には、第七期卒で現在徳山市議会議員の古谷幸男氏を推薦することを決定しました。

脇演習卒業生のみなさまへ 第二回 英会(はなさき)開催される!!



皆様お元気でお過ごしでしょうか。英会を結成して、早いもので二年目を迎えた昭和六十二年七月十八日に、脇演習卒業生十一名が徳山大学の近くに最近建設されたばかりの保健福祉センター（ヘルシーパル）で、脇英夫先生をお迎えして一泊二日の日程で、第二回英会を開催しました。

脇先生より「私の近状報告」と題して近年の研究発表著作の紹介のあと、演習Ⅲの特別講座を開いていただきました。先生のテンポの良い講義を聞いているうちに、学生時代へタイムスリップさせられる思いでした。

また、特別ゲストとして、中国黒竜江省から徳山大学へ留学中の董暮螢（トン・ムー・ヤン）さんをお迎えし、徳山での生活体験、授業風景など、流暢な日本語で、ユーモアをまじえた話がとても印象的でした。

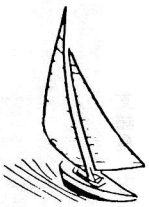
懇親パーティでは、各々の近況報告をしたり自慢ののどを披露したり、夜のふけるのも忘れて学生時代の思い出話に花がさきました。

翌朝、思い出の学舎や、今年四月に開学した女子短大の斬新なデザインの校舎や、大型コンピュータールームなどを見学しました。

益々変容し、着実に発展する母校を目の当りにして、なおいっそう頑張らねばと己れに誓い、第三回英会での再会を約束し母校をあとにしました。

脇先生へのお手紙や近況報告などは
徳山市久米栗ヶ迫八四三―四―二
徳山大学校友会内
英会事務局まで

ヨット部OB会 海　その愛



徳山大学勤務
中村道陽（十一期生）

海、その愛などと、少しキザなタイトルにしましたが、これは私にとっての永遠のテーマであり、学生時代を象徴する言葉でもあるのです。

私は、現在ヨット部のOB会であります徳帆会（とくほかい）の事務局長を務めさせていただいております。ここ徳山を中心とします周南地域には、幸にも多くのヨット部OBが在住して、地域社会で活躍しています。部のOBは関東から九州まで散在していますが、この周南地区のOBが結束して卒業後もなお全国のOBと連絡をとり友情をあたためています。

年一度の総会をはじめ、忘年会、会報の発行、現役部員への援助、現役部員との親善ソフトボール大会などアクティヴな活動をしています。

周南(Shunan)と湘南(Shonan)はたった一字違いです。ともに海に面した町です。私達はShunanbeachboysと自分達のことをよんでいますが、いつの日かこの周南が湘南のように若者の声で溢れる町となるよう、今日も海をみつめては、ふとそんなことを考えてみたりもしています。

海　その愛 by Yuzo Kayama

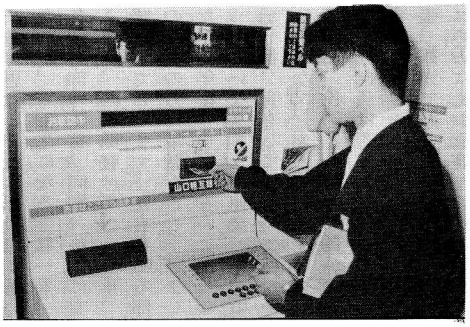
駆けのぼる若い太陽 大学紹介！

おお徳山大学、おお徳山大学、
駆けのぼる若い太陽

本学校歌の一節であります。昭和46年4月に開学した本学は、校歌の一節の如く、今や草創期から発展期へと、その歩みも着実に駆けのぼりつつある。その間、昭和50年第1期生から、昭和62年第13期生五千余名の方々も幅広く社会に貢献されているものと推察いたします。今回この紙面をおかりして発展する本学と題して一部ではありますがご紹介させていただきます。私は、昭和52年第三期の卒業であり縁あって本学職員として勤務させていただいております。

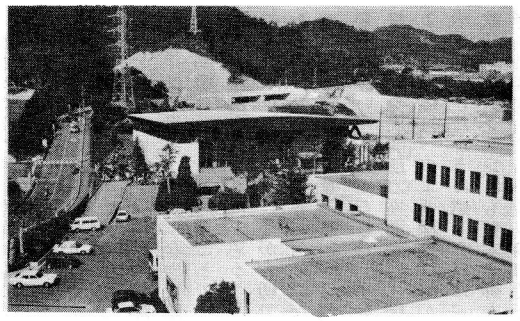
現在総務課に所属しておりますが、一昨年前までは9年間学生課に所属し、主に厚生補導面を中心に卒業生として後輩の指導、育成に勤めて来ました。しかしながら業務の中で一つだけ本学に対し不満に感じた事を述べると、それは施設面であります。我々の学生時代の施設といえば、本館、各教室雑草だらけのグランド、唯一の憩いの場が学生食堂といった具合であったが、社会人から入学した私は、勉学が出来れば良いと学生なりに中ば諦めておりました。

しかし、職員となり特に昭和52年頃からの学生部（文化体育会）を中心とした課外活動の育成・強化が叫ばれる頃から、施設面の不満が私の中に大きく広がっていった。現在本学の課外活動は、中四国でトップレベルに推移している。これも当時、野球場、体育館、クラブ施設もほとんど無い状態で頑張って来た多くのクラブ生、部長、監督らのたゆまない努力でありその苦慮は、想像を絶するものと考えます。又、本学の校風ともいえる〝学生、教職員一体〟の信念が成しえた成果と深く信じております。その様な中で、本学も着実に発展を遂げ、52年8号館（ミニ体育館）完成、57年記念会館、10号館完成、58年本館増築、図書館新築と進められ、48年入学の私から見た大学は、目覚ましく大学としての風格を整えて来ました。とりわけ記念会館完成は、卒、入学式が本学で挙行出来る事で大変嬉しく思いました。学生時代、クラブ団体に所属しておりましたが、近隣の高校へ体育館を借用に行く事が何かとても心苦しかった事を今も覚えている。人には何がしかの誇りがある。少し変な誇りかもしれないが自分の学ぶ大学に誇りを持っていたから、高校生の疑惑な眼差しが気になってならなかった。早く本学に体育館が欲しいその一念であった。



本紙にも幾度と紹介したが、62年4月待望の徳山女子短大が開学し、一期生一四七名が本学に花を添えてくれた。体育祭、六月祭、大学祭と男性ばかりだった大学行事が一気に活気溢れるものとなった。施設面も短大と平行して、須々万グラウンド（野球場）の新設。学生の福利厚生施設も、5号館一階に冷暖房完備の第二食堂完成、徳大指定店協会の文具販売店、山口、山相2店のCDコーナ開設、現在4号館学生食堂の内部改修工事等、学生厚生施設面の充実も急ピッチで進められて来ている。又、記念会館北側の丘に、現在山陽自動車道の工事が進行、山林造成が進み、大学当局では、校地内の整備拡充を図っている。自動車道完成時には記念会館横に七千㎡の校地が整備され近年には学生駐車場・学生会館・第二体育館等、大々的な施設拡充が計画されようとしている。この様に着実に発展しつつある本学にも将来的不安があります。皆様もマスコミ等でご承知のとおり、大学経営の危機と騒がれている18才人口の激減傾向であります。この様な状況の中で、私立大学としては、独自の経営的裁量が早急に問われようとしています。

すでに、中四国地区の私立大学も学生のニーズに答え施設の拡充を図っております。本学に於ても「私高国低」という言葉の如く早急に将来の発展、安定の施策を図っていただきたい。又、卒業生の一人として微力ではありますが本学の発展に今後も努力したいと考えます。



徳山大学の現状と将来について

常任理事法人本部長
長藤利夫

当徳山大学は、昭和四十六年に開学後、昭和五十一年度に経営学科の設置、昭和六十二年度に女子短期大学の開学等、着々その基盤が固りつゝあります。また最近の入学志願者の状況は、過去数年間は一千人前後を続けて来たものが、昭和六十一年度に一五八二人、昭和六十二年度に二〇〇一人と急増してきております。これは戦後二番目のベビーブームが十八才人口の増加につながっていると考えられます。この増加傾向も、昭和六十七年の二百五万人を頂点として急激に減少し、昭和七十五年には、百五十一万人に、昭和八十年には、百三十二万人に減少すると云われております。

アメリカでは、丁度十年前にこのような状況が訪れ、多くの大学が倒産、閉鎖、縮少、売却されたと聞いております。我が国においてもこのような状態は必ず来ると考えられます。例え倒産、閉鎖に及ばなくとも、入学志願者が極端に減少すれば、必然的に学生の質の低下となり就職にも影響して参ります。

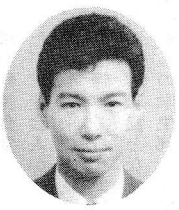
このような情勢を踏まえ当大学でも、法人内に満十八才人口激変対策委員会を発足させ、教授会と連繋をとり対処することになりました。現在迄の実績に再検討を加え、臨教審の答申や、社会情勢を考慮し、教学、研究部門を始め管理、施設面、また学生の厚生補導の在り方など、全般に調査検討を実施し、学生の素質の向上、魅力ある大学造りに努力することにいたしました。

又学内では、開学十六年を経て、校舎などが漸く老朽化が目立っています。これらの改修についても単に改修するに留まらず新時代の大学像、若者の志向に合った方向で行わねばなりません。又臨教審答申の核である高等教育の個性化、国際化、生涯学習体系化の課題にどう対処すべきであるか、地方の大学が地域とのつながりをどのようにして強めて行くか、より違いのある教育「徳山大学ならでの特色ある教育」を行うにはどのようにしたらよいか、教職員全員で考えて行かねばと思います。

当大学は、女子短期大学を含めて、一応の大学設置基準は満たしているものの、学生が受ける教育を更に充実させるには従来の施設に加えて、学生会館、学生ホール（自習室）講堂、或は体育施設、駐車場なども順次設置する必要があります。これらの施設を有機的に配置するための校地、更に将来の飛躍発展のための新校地も確保して行きたいと考えております。

このように当大学には問題が山積しておりますが、教職員一丸となって一致協力して参りたいと思います。校友会の皆様方にも事情ご理解賜りご協力をお願い申し上げる次第です。

OBだより



高木　敦（七期生）

各諸先輩方、御無沙汰しております。私は、第七期卒業生で、大学四年間弓道部に在部しておりました。まずは近況報告から、卒業してもう7年、三十と大台を目の前にし、まだ一人で1DKのマンションに住んでおります。一時、郷里松山に帰っていましたが、縁合って又、徳山へ居坐る様になり、まる四年が過ぎました。現在、貯水槽清掃業に従事しております。貯水槽清掃とは?、ビルの屋上に良く見かけられる高架タンク等の清掃で、東は関西、西は九州まで営業範囲を…と将来考えておりますが、現在周南地区を中心に走り廻っております。おかげさまで、公共施設、教育委員会等で仕事を頂き、年度末には現場、と言う毎日です。新聞、雑誌の中でも〝今、飲料水が危ない〟とか言われ目につく様になり、先輩方の中にもそう言った、管理の地位になられている方もいるかと思います。自分のマンションは?この会社は?と不安になったら、迷わずダイヤルを廻して下さい。私達スタッフが悩み、不安を取り除き、安心して飲んでいただける飲料水に変えてみせます。ただし、只今ダイヤルが混んでいますので、地域を限定させて頂いてます。なにとぞ御了承を！

話は変わり、弓道部も去年、創部十周年を迎える事が出来、各方面の多くの方々にお礼を申し上げます。思えば、新入部員で4名いたのが、二回生になると私一人、各武道部の先輩、同期、後輩に支えられ、四年間続けてこれた事、感謝しております。先日もある部のOBの方に電話をさし上げました。七年振りで、お互いに、「なつかしいなぁ～」の連発。あの頃が一番、青春していた時ではなかったかな?とふと思います。

現在、各部とも新入部員が少なく、在部員は苦労しております。各部のOBの方々、山口県へ、出張、観光でおいでの節は、キャパスの方にもお立寄りお願いいたします。

私も短大が出来たせいか、足を運ぶ回数が増えている?、そんな気がしないでもない今日、この頃です。皆様もお気軽に…

馬鹿な文章ばっかしで、何か原稿を書きながら、学生時代に戻りつつある気がします。文章って難しいですネ、もう一度、大学へ入学しようかな?今度は多分落ちるでしょう。

とりとめのない文章、読んで頂きまして、ありがとうございました。

勤務先　西日本環境設備㈲
電話　〇八三四－六二－二二四㈹
御一報を！

第23回国際社会福祉会議に参加して

徳山大学助手
冨吉繁貴（二期生）

一九八六年八月三一日～九月五日までの六日間、新宿の超高層ビルの林立する谷間の一角、京王プラザホテルを中心に、第23回国際社会福祉会議が開かれた。日本で開かれたのは、前回の一九五八年に次いで二度目である。まだ、その時の日本は、高度経済成長政策の実施段階であり、発展途上国時代であった。

今回は、参加国数も倍以上の八二ヵ国で、海外から大体一三〇〇人、国内から約一二〇〇人もの参加を得て開催された。メインテーマは、「家族とコミュニティの強化―福祉社会の実現をめざして」であった。急速な経済の近代化、産業化、都市化が進んだ結果、現在の日本は、核家族化の進展と地域社会の絆の崩壊によって、家族とコミュニティを支援する体制を如何に社会福祉によって再構築するかということが重要な課題となっている。その意味で時宜にかなったテーマだったと言えよう。高度に工業化した社会では、生活自立をはばむ諸状況が増大する中で、社会福祉による新たな生活支援体制が不可欠なのである。

開会の挨拶で、皇太子殿下は、「最近では、社会に復帰し自立した障害者をみることができるようになり、障害を克服してようやくスポーツを楽しめる社会になったことを喜んでいる。特に、国際障害者年は、世界が一つになって障害者問題を考えたということで、大きな役割を果たしたと思う。このような世界の連帯こそが大切である。この会議も世界が一つになって福祉を考える機会であり、大変意義深い。」と述べられた。中曽根前総理の民間活力推進論の挨拶よりも、福祉へのより深い理解が示されていたように感じられた。

歓迎レセプションにも皇太子御夫妻は出席されて、各国の参加者と親しく話されたのは印象的であった。

国際社会福祉会議で特に感じたのは、経済の南北格差よりも、福祉の南北問題は一層大きな問題であるということである。北の国にとっては社会福祉の充実が緊要であるけれども、南の国にとってはそれよりも農村の経済開発や社会開発の方がより切実な問題なのである。文盲率の低下、高等教育への就学率の向上、公衆衛生教育の充実、飢えからの解放、といったことの方が先決問題なのである。そして我々北の住人は知らず知らずの内に、南の国への経済侵略に加担していたり、森林破壊をもたらしていたりするのである。

アジア地域課題別会議で矢口雄三氏の言われたこと。日本の割り箸の使い捨てが、東南アジアからの木材の輸入を増大させ、熱帯の森林破壊をもたらしているので、いつも自分の箸を携帯して使っているという話には驚ろかされた。勿論、熱帯の森林破壊は、焼畑農業による所も大きいのは確かである。宇宙から見た地球は、暗黒の世界の中で、ブルーに輝くオアシスである。そして、その地球を更によく見ると、南と北に二つの赤い光が見えるそうだ。それは北の工業地帯の工場の煙突から吐き出される炎と、南の熱帯森林が焼畑農耕で燃やされている炎だそうである。これらの人間の生産活動から排出される二酸化炭素等の量もまた、地球の環境問題に大きく影響を与えているのである。宇宙船地球号に乗り合せた我々人類の平和と福祉の向上は、我々の生き方それ自身に深くかかわっていることを身近に考えさせられ教えられたように思う。

もう一つ学んだことは、クライエントの立場に立って考え、その声に耳を傾け、少数者の心の痛みを理解して、社会に対して代弁するのが、ソーシャルワーカーの果たす社会平和への大きな役割の一つであるということである。以上何か近況をという事で書いた次第である。OBの皆さんの益々の御活躍を！

O・Bから在学生諸君に

今本康徳（十二期生）

私が大学を卒業して早くも二年、ポプラの木の成長と共に年々充実躍進する母校の話を耳にするたびに頼もしく感じる今日このごろである。

現在私は、防府警察署駅前派出所において勤務している。派出所勤務は不規則であり、実に様々な事案に対応しなければならない。パトロール、事件、事故の取り扱い、交通事故の防止、犯人の検挙をはじめ盗難や落としもの、拾い物の受付け、地理案内、市民と信頼関係を深める家庭訪問等広い視野にたった多種多様な職務を遂行している。当然、肉体的、精神的に過酷なものを要求される。しかし在学中に学んだ知識・行動力を基に県民の平和な生活と安全を図るため誇りと使命感をもって治安維持にあたっている。それは男として実にやりがいのある仕事である。今後も徳山大学の名に恥じぬよう精一杯職務に精進していく所存である。

在学生諸君、大学生活四年間は知識技能の習得と同時に人格形成の上で重要な時期であると思う。この四年間をいかに充実したものにするかは、諸君が大学生活に展望を持ち、何ごとにも積極的に取組めばおのずから結論が見い出せるのである。学問を極め己を磨き加えて徳山大学のよりよい伝統をつくるのは学生一人ひとりの力である。輝かしい伝統を築きあげるために一丸となって頑張ってもらいたい。私はO・Bとして最大限の協力をおしむものではない。

＊　＊　＊

OB諸君へ

「散　歩」

森脇　憲

私は昭和五十九年十二月二日の日曜日夜半、突然脳血栓に襲われ、直ちに救急車で南陽病院に運ばれその侭入院、翌昭和六十年三月二〇日にやっと退院することができた。一〇九日間に亘る入院中は、終始車椅子による生活であって、廊下を歩くにも、トイレに行くにもすべて車椅子と家内のお世話になった。幸いに、知能的にも肉体的にも、何等後遺症もなく、昭和六十年の新年度からその儘非常勤講師として週一回再び教壇に立つことができ若い私の孫見たいな学生諸君を相手に楽しく授業をすることができたのは、私にとって誠に感謝に堪えないことであった。

さて、一一〇日目に南陽病院を退院するに当り看護婦さんから退院後必ず実行するよう忠告を受けたがその主なものは次の通りであった。

一、毎日必ず散歩をすること。

二、美食を避け、三度の食事はいずれも低カロリーの食物をとること。

三、二週間に一度は必ず来院して主治医の診察を受け薬を貰うこと。

四、酒は少量ならよいが、煙草は絶対やめること。

等々と十数ヶ条の注意書を受け取った。（これらの注意事項は、曲りなりにも今以ってまあまあ実行して今日に至っている。）

これらの注意事項のうち、第一に挙げた「散歩」であるが、私は散歩の日課として（大雨、大風でない限り、そして大相撲、高校野球がない限り）毎日午後三時頃、一番町一丁目の寓居を出て「万葉の森」へ行き、池の端のベンチに腰を下し、持参の食パン四、五枚を細かにちぎって池の鯉や周囲の森に住む鳩や雀たちに与えて静寂な緑地公園での暫しの憩いを楽しんでいる。そして「万葉の森」を出て「東川」の桜並木のある公園へ行き、気が向けば銀座通りに出て古本屋で何か中国の古典を漁って二、三冊買って帰る。これが私の一般的な散歩コースである。

このような、毎日殆んどきまったコースを散歩するうちに、一つ楽しいことに気がついた。それは、どう見ても私と似たような年恰好の紳士、（何故わざわざ私がこの人を紳士と呼ぶのかと言えば、この紳士は、暑い夏の真盛りでも白い手袋をしてソフト帽を冠り、ステッキを持ち、茶色のダブルを着こなして殆んどいつもきまったコースを散歩なさるからである。）しかも少くとも一日に三回は私の寓居を中心として直経一粁ばかりの範囲を散歩している。譬え大風、大雨の日でも平気である。

こんな毎日を送っているうちに、私もこの紳士に負けじとばかり、今日まで散歩をつずけているのだが、いつのまにかどちらからともなく目礼を交わし、目礼が会釈に変り、最近には会釈が四季、天候の挨拶にまで発展している。然し私は今以ってこの紳士のお名前を存じ上げない。又別に知らなくても差し支えはない。「やあ、今日は、お元気ですか。いゝお天気ですね。」で済むのである。

私が（今から五十五・六年前の）学生であった当時、確か大阪の谷町かどこかの古本屋「天中」書店で買った中国初唐時代の詩人「賀知章」の詩「題袁氏別業」というのがあった。私は若い学生の頃、この詩が好きで、今でもこれを諳んじている。（詩の善し悪しは別として今から千二三百年前、玄宗皇帝の居た長安の都の、如何にも平和な、生活に屈託のない、人々の暮し振りが窺えて好きで堪らないのである。）

題袁氏別業（袁氏の別荘にて）

主人不相識　偶坐為林泉　莫謾愁沽酒　囊中自有銭（大意：私はこの家の御主人と平素知り合いではない。だのになぜここの主人の家の座敷に上り込んでお酒を御馳走になっているかと言えば、私の散歩の途中、ここの邸宅の林や噴水を褒めたのが機縁で誘われるままに座敷に上り込んで今こうして好物のお酒を頂いているのである。だが私が大酒呑みなのでここの御主人も半ば惘れ果てて、あといくらも残っていない酒を買いに行くのを心配して居られるかも知れない。だが御主人よ、酒を買う銭なんか御心配召さるな、財布をあけて御覧じろ財布の中には銭はひとりでに湧いて来るものですよ。）（注賀知章は唐代切っての「海量」（大酒呑み）であって、唐詩選（杜甫作）の真先きに載っている程の人物である。）

今私はこの詩を想い出した。「今度この紳士に出逢ったら一つ我が陋宅に誘って共に一献差し上げてみようか」と今考えている次第である。妻にもまだ話していないが、恐らく反対されるであろう。（この御仁が酒の好きなお方なら誠に好都合だが、もし辛党でなく、甘党であったらそれこそ引っ込みがつかなくなる……と言って反対するであろう。）でも私は失望しない。人生は短かく一度しかないものだ、生きている間に出来るだけ多くの知己を持ち愉快に一生を終り度いものだと考えるから。中国人がよく言っている。「有縁千里来相逢無縁対面不相識」（人生若し縁があれば千里も遠いところからでも逢いに来る、反対に縁がなければ向い合って坐っていても一言も話をせずに離別してしまうものだ。）

私はやんちゃが好きだった

三好千八

六十五才で、さる企業を停年して、本学の教壇に立ってから十三年になる。外書講読といふ一コマを受けもった時、元々化学屋で、テキストに困ってダーウインの種の起源（俗称進化論）を読んだ。多少難解であったのか、思う様に順調に進まなくて考えさせられたが結局教壇に立つ自分の姿勢に問題があるのかなと思う様になった。

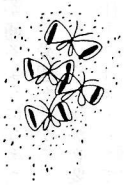
キリスト様は井戸に落ちた旅人に梯子をおろして下さったそうだが、私は此の梯子を下りて学生と肩を組んで上に上らなくてはならないと考えた。今まで、教壇に立っていた自分は学生と向い合って（対面）いたことに気がついてそれ以来私は向い合い――対立――の姿勢をすてゝ学生と同じ方向という姿勢をかたくなに守り続けて今に到いている。信頼とフレアイは教育の源点だと思っている。

研究室にお茶とコーヒーを準備し学生諸君の自由な話しの場として呼びかけた。友は友をよび、講義に関係のある人もない人も勝手な話をして帰って行く様になった。まじめな話もあったが、そうでない話もあった。当然乍ら其の方が面白くて、部屋のふんいきに不安感がなくなって来ると深刻な話しもプライベートな秘密な話しも出て来る様になった。点数をねだる話しもあったが、先生の一課目の為に自分は留年しなくてはならないのですよと云う型もあった。私自身も多くの世界のことを教えられたが、当時研究室に来た人は、総じて一くせも二くせもあるやんちゃ学生が多かった様に思った。あとあとまで印象に残る人が多い。そして、そうした学生達も一対一で話しをすると、敢えて優等生とは言はないが、十人が十人皆善良な学生である事を発見した。そして此の発見は私の教壇生活の中で何よりも仕合せな発見だったと思っている。

専門の分野はしばらくおいて、私はスポーツ其他趣味道楽のたぐいにも可なりうつゝをぬかした。又可なり重症であったので、家の中でも一言も二言もあったがしかしおかげで思いもかけない世界を発見したり体験してよかったと思っている。そして其のことは学生諸君を理解するのに大きく役に立ってよかったなと思っている。五十八年学生主事になってからも役がら相談室で学生諸君と話す機会があってしあわせたが、場所柄もあってやんちゃな元気者の学生が少なかったのはさびしかったが、学生と同じ側に立って――対面ではない――共感を求める姿勢は、今まで学生に対してとって来た自分の姿勢と変るところはなかったし又此処でも逆に教えられる所が多かった。

私は優等生も好きだったが、やんちゃ坊子が好きだった。優の数がたとい一つ二つどうあろうとも其の人柄と活力の点で一旦社会に出たら、一増活躍しているだろうと思えてならない。学園祭等の折には一度あって見度いと思うことである。

（非常勤講師・学生主事）



〈教務・入試〉

創立二十年に向って

教務部部長
大西昭生

今年も卒業式が近づいてきた。徳山における四年間のさまざまの思い出をもって、社会に巣立ってゆこうとしている。彼らの社会においての活動が、本大学の評価となるだけに、送り出す我々教職員にとっても期待と不安が交差する時期でもある。

昭和四十六年に本学が開学されて、早や十七年が過ぎようとしている。その足どりは、急速なものでないとしても、着実に進歩してきているものと確心できる。

百二十数名で開学した学生数が二千四百名を数え、二十数名の教職員が百名を過え、かつ女子短期大学も併設されることとなり、名実ともに総合大学へ向けて着実に歩んできている。

設備面でも、体育館、野球場、図書館と一応の体裁は整えつつある。残る学生会館や同窓生会館と第二グランド、体育館もテーブルに上ってきつつある。

昭和六十六年まで、あと三年で創立二十年を迎えようとしている。この時期に合わせる様に、本学の一層の躍進が望まれる。

カルキュラムの充実と、社会に対応できる教育と教授陣の補強を計る一方で、入試改革から制度の充実によって高い質の学生を募る。換言すると、良い教員と良い学生、良い設備と個性化を推進してゆけば、卒業生が誇れる大学となってゆくのではないだろうか。

世の中が国際化、情報化に対応すべく大学に求めているものも多いだけに、目先の動きに捕われることなく、大学の長期展望に立った大学作りが求められている。

そこで、我々の教務にあっても大局を見失うことなく、将来を睨んだ教学の充実を計ってゆきたい。本年からの一年目の教務部長であるが、有望な職員の助けをもって、かつ創立期の意欲を再燃し、新規の事柄を強力に推進してゆきたい。最後に、卒業生の元気な顔との再会を楽しみにしている。互にそれぞれ置かれた立場でベストを尽そう。

〈学生部近況〉

『この一年』

学生部部長
佐原昌弘

昭和六十二年度は、学生部にとって本当に悪夢のような年であった。六月九日午前二時二十五分頃、本学学生が交通事故を起し、同乗者三名を含む四名の学生が死亡した。

その日私が出校すると、沢山の新聞記者や放送記者が待ち構えていた。私は二階の学生部事務室に行く間もなく、一階応接室で緊急記者会見を始めざせられた。矢継早の質問を受けながら、私はぼんやりと交通事故の現場と死亡した学生の顔を頭の片隅に描いていた。『馬鹿な奴らだ！ご両親はどんなに悲しまれることか。あれ程日頃から交通安全を注意していたのに』そんな無念さに胸が掻毟られる思いで私は記者たちの質問にひとつひとつ答えていた。なかにはそのような私の気持を逆なでするような質問や言葉を吐く記者たちもいた。『あなたたちは本当に教育現場を知っているのか』と怒鳴りつけたい思いを何度も押えながら、やっと記者の人達から解放されたのは昼過ぎた頃であった。食欲もなく、ついに食事をとらずに夜遅く帰宅した。次の日もまたその次の日も事故の後始末に走り回った。徳山警察署から呼び出しがあり、学長と私が出向いたのもその頃であった。警察署長より警告文をいただき注意を促されている様がテレビ放映され、近隣の友人、知人たちから励ましの電話をいただいたのもこの時であった。山口県警が召集した大学生交通安全対策会議で報道陣のカメラが私に集中するのを見た或る大学の学生部長さんが私に「先生は今スターですね」と冷かされた。それ程当時私は新聞・テレビで話題になっていたのである。でももう二度とあのような話題提供者にはなりたくない。なんとか学生たちが、命の尊さを自覚して欲しい。これからも学生一人一人に交通安全を呼びかけ、命の尊さを訴え続けていきたいと思っている。

さて明るい話題に移ろう。それはなんといっても姉妹校である徳山女子短期大学が開設されたことであろう。四月には百三十名余りの女子学生がまさに徳山大学のキャンパスに花開いたかのように集って来たのである。夏休み近くなると既に男女のカップルがキャンパスのあちらこちらで目立つようになった。若者らしい頬笑ましい光景であった。体育祭・六月祭・大学祭では大学生・短大生が仲良く協力し合って今までにない充実した催物を創り出してくれた。新学期からは更に女子学生が増加する。ます〳〵徳山大学も活性化するに違いない。大いに楽しみだ。

次に本学陸上部の中四国大学駅伝八連覇である。今年のチームはこれといって飛び抜けた選手はいなかったのであるが、豊富な練習量で選手層の厚さを誇り、他大学の追随を許さなかった。しかし、松山商科大学が打倒徳山大学を目指して陸上部の強化に本腰を入れてきており、近年特に強敵校になって来た。本学陸上部も常勝徳山大学をスローガンに日々練習に励んでいる。国道二号線（以前のバイパス）をトレーニングしている若者がいたら、それは本学の陸上部員であろう。卒業生の皆様も彼らを見かけたら、是非足を止めて励ましの声をかけてやっていただきたい。

このように私のこの一年間は、いろ〳〵な出来事と遭遇しながらも、私の側には常に学生が存在し、その出来事の創造に学生と一緒に参画し、そしてまたその出来事の問題解決にあたっても学生と一緒に苦悩してきた。これからもこのような生活が続くだろう。それがまた楽しみなのである。

〈就職状況〉

人間関係の教育を後輩に！

就職部部長
有田稔

就職部の立場から、就職の決まっていく学生をみていると、学生にとっては勉学と並んでクラブ活動が実質上非常に大きな教育効果をもっていることが実感されます。

私自身徳大に来て直ぐ「経済学研究会」という学生の同好会の創設を指導し、今また「弓道部」の部長もひきうけさせていただいておりますが、部で活動中の学生の別人のようにイキイキした姿にいつも驚いている次第です。

クラブでの活動は学生諸君に、礼儀作法とまで大袈裟ではないにしても、対人態度とか社会性とか組織の中の一員としての自覚とかの人間関係を身につけさせる学生時代唯一の機会であり、このことが入社試験の面接の場合大いに効果を発揮したということが切実に感じられるということです。

現代の日本社会は、物的生産は殆んど機械やロボットが行い、直接生産者は少数ですむ時代にますます近づいています。ということは、とりもなおさず大部分の人々は営業とかセールスとかサービス業とか呼ばれる第三次の部門や産業に従事するという必然性をもっているということ換言すれば人間関係がますます重要度を増してくるということです。

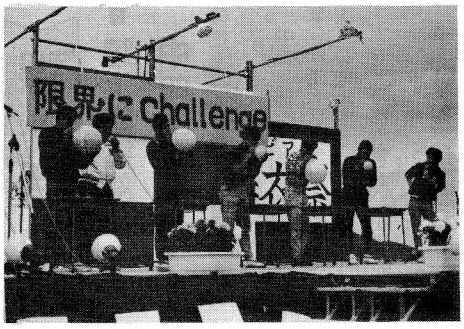
職人気質といわれ、頑固で愛想は悪いが腕はよいという職人が昔よくいましたが、我儘を通したいから腕を磨いたのか、腕がよいので我儘が通るようになったのかは別として、愛想が悪かろうが偏屈であろうが、その腕が必要なので人々が仕事の注文をもってくるから、暮らしていけるということ、すなわち、人間関係を軽視しても生活できるというタイプの人間が存在しえたのです。それにくらべ商売人は昔から洋の東西を問わず愛想のよいものとされていますが、それは対人折衝だけが仕事の主要部分だからです。「彼らは直接的には何ものも造らない。彼らは人からできるだけ安く買い、別の人にできるだけ高く売りつけるだけである。」このためには相手に好印象を与へなければならない。そこで商売人はどの時代でも、どの国でも、ソフトで愛想がよいのである。商売人とは対人関係の仕事をする人々のことを云うとさえ極言できるのではと思える程である。

だから、生産のオートメ化によってサービス部門、サービス産業への就業率が高くなるこれからの社会は大部分の人々が本質的には商売人として生活していく時代といえるでしょう。

このようにこれからの社会は人間関係が重要となるので社会経験を積まれた徳大OBの先輩方の現役学生への指導助言を望む次第です。特にクラブ関係のOBの方々は徳大生のクラブ活動の活発化のために現役の後輩達を折にふれては教育指導してやっていただきたいと思います。長い年月の間にはクラブが乱れたり、不活発・低調になったりすることがないともかぎりません。先輩方の御指導に期待するところ大なるものがあります。

学生行事

ポプラ祭レポート



あの熱狂の日々は繰り返されているのか。さて夏の祭り、今年程盛り上ったことはないのではないか。あの五月薫る体育祭、実は隣接の徳山女子短大との初の合同イベントは成功裏に終った。続く歓迎行事、六月祭は、バラエティパーフォマンス、華やかなマドンナたちとの出会いであった。梅雨明けの夜空を焦したファイヤーは、大学祭の成功を期待して、大学祭実行委員会の面々の涙の感動によって、夜空に消えた。

めぐるめく夏を過ぎ、秋のポプラ祭は準備万端、期間を密度ある凝縮したものにして繰りひろげられた。一週間前の恒例のタレントのコンサート、「ベイブ」二人の女性ボーカル。地方の知名度の低さの予想を反しての入り。校友会諸氏の後援もあり、会場、総立ちの興奮の前夜祭になった。ライブとはかくありたい。本祭前の市中パレードは、無情の雨に流された。あの赤フンみこしが見れなかったのは残念であった。誰かはホッと胸をなぜたかも知れない。

明けて10月30・31、11月1日と、大学キャンパス、グランド、一帯は、クラブ、ゼミ、クラス、団体による、模擬店バザー。31日はコミック、「何人トリオショー」ゲーム、クイズなど、参加しないとただの人。近辺の大学も、コンサート、バザーと、それなりに大学の祭は楽しめるもの。あの焦げたクレープ、辛くも甘くもない焼ソバ、飛ぶように売れたうどんと、卒業生諸兄の来学を歓迎している。

隣の短大も、情報システムによる実習公開、キャプテンシステム活用など見のがせない催しが多かった。やや心残りは、ゼミ演習など発表が少なかった。これも時の流れかも知れない。マスコミ研究発表の、クラスの仲間など、見所もあった。短大の「サルビア祭」（徳山の市の花にあやかった祭）も盛大で、同じ期間、隣接キャンパスにいつもにない市民、OB、OGの姿に大学はにぎわった。先輩も後輩も入り乱れたるつぼは秋にあった。来年への期待、その一同窓生の参加、集合の場になるのではなかろうか。その二、演習など発表の機会が多くなるのでは。その三、徳山の秋の祭の一連になるのでは。その四、全徳大の文化の醸成されたものがあると確信する。来たれ同窓、秋のポプラそびえる久米の丘へ。63年6月4日創立記念六月祭。10月28・29・30日徳大ポプラ祭。

追伸ながら徳大の伝統になりつつある、アルコール抜きの、手作りの、青春の感動は、後夜祭で大学祭実行委員の涙の胴上げで鮮明に残った。

なお、ゼミ演習で勉強をされた卒業生にご報告します。第27回中四国学生政経ゼミノール大会は、ポプラ祭の後、11月28日29日、加盟、9大学のゼミナリスティニ、200余名むかえ、厳粛かつ活発な発表、討論により、実り多いものを残しております。ご安心下さい。勉学の秋もありました。

維新の道

維新の道（萩往還踏破）強歩大会、O・B・G諸氏には、鹿野漢陽寺→徳大の夜間行軍の体験を連想されるのではないだろうか。

時と場所を、山口県が全国に誇る、山口↔萩、明治維新の志士のかよった歴史的博物道、萩往還（正確には三田尻港（防府）まで）を晩秋の紅葉輝く10月末、ポプラ祭前日、踏破する恒例行事である。（テレビ放映で全国に知る人ぞ多い）今年は隣りの女子短大生も加わり、一般の方も探訪された、いわゆる合ハイであった。国境の碑、六軒茶屋など史跡説明を受け、目指すは、昼の佐々並宿場のとうふ汁。主事室（校友会事務局の女史も手伝い）調理の暖を取り、小雨に濡れた体を奮いたたせ萩へ。志士のふん装をこらした者、日頃の道着に松陰先生の詩の幟を持った者、など、37Kの道のりを無事、宿舎、萩本陣に到着。翌朝、松陰神社参拝。さて、昭和の松下村塾生は何を体得したであろうか、維新回天の地で学んだ気概は卒業後活躍の礎えとなると確信している。

徳山女子短期大学 第一回 緋衣（サルビア）祭

去る10月31日・11月1日の二日間、第一回徳山女子短期大学「緋衣祭」が行われた。

開学一年目。短大は徳山の市花がサルビア緋衣草・ひごろもそう）であることから緋衣（サルビア）祭と名付けた。

テーマは「MAKE HISTORY」この感動を永遠に。第一歩を踏み出した大学祭で、一人一人がそれぞれの胸に思い出として刻みこんだことだろう。

内容としては野外ステージにおいて、「フィーリングカップル」短大軽音楽部によるコンサート。「ミスターコンテスト・美少年を探せ」など終始なごやかな雰囲気に包まれていた。

学内では、各教室を開放し、ウエディングドレス撮影会や生け花展のほか、コンピュータを駆使し、学生が作ったパソコンゲームや心理テスト、万年カレンダーの〝コンピュータ教室〟も行われた。また女性らしく「茶道」現代感覚の「ディスコ」。玄関前では、模擬店やバザーもかなりの繁盛ぶりだった。メーン企画である「ウエディングドレスショー」は記念館で行われ、12人の学生たちが、あこがれのウエディングドレスを身にまとい、観客を魅了していた。

小規模ながら、実行委員を中心に、全員で一生懸命打ちこむ姿勢に、感銘を受けました。短大も色々な方々に支えられ一年、彼女たちが、今後より一層飛躍することを祈っています。

昼休み大運動会「連続球技大会」

秋はスポーツ。これに限る徳大生は多い。まず昼は食欲、闘争欲にと、スポーツは最適。

バドミントンから卓球と個人種目から始まって、人気の的はソフトボール。昼休みではもの足りない連中で32チーム。早朝ソフトと相成った。講義は寝ぼうしても、これだけは棄権なし。表彰のあいさつにも、「この情熱を勉強にぶつけてくれたらいかになろうか。」とあったりもした。投手戦あり、打撃戦、先行逃げ切り、ラグビースコアの大敗あり。接戦大逆転と、草野球特有の（最近はプロも多い）珍プレーの大爆笑のさわやかさは参加しないと解りません。

バスケットボール、バレーボールと、受け付け開始日に締め切るという盛況。ソフトでだめなら、バレーがあるさと、下宿、クラス、クラブのまとまりは、これに限る感あり。毎年バスケットはこぜり合いが付きもの、この争いがたまらない連中もあって没収試合も出るありさま。とまあ同窓諸兄も心当りのある方も多いのでは。いよいよ冬、しめくくりは、綱引き、オリンピック種目でもあったようで、奥の深さは最近の流行にもあらわれている。パワーホールド（相手に引かせ、疲れたところを一気に引き返す技）で力が続かずごぼう抜き、終った後のあの虚脱感、もう参加賞だけでは終れません。目指したメダルトロフィーは力、チームワークの結晶です。昼には近くに来られたら、応援にかけつけて下さい。短大生の黄い声も記念館（体育館）に響いてます。

課外活動

■陸上競技部

中四国駅伝 破竹の八連勝！

師走恒例の第31回中国四国学生駅伝競走大会は、昭和62年12月6日、午前9時、山口市民館前をスタート、防府市右田、佐波郡徳地町を回り、山口市中国新聞社前をゴールとする、6区間（六五、六キロメートル）で、オープン参加を含めた23チームによって争われた。

徳山大学からは、Aチームとオープン参加のB・Cチームが出場。まず、1区では予想どうり徳山大学の3チームが抜け出し、好スタートを切った。2区、3区でB・Cチームが遅れ出し、Aチームの独走かと思われたが、4区に入って一時は、好調の岡山大学に並ばれた。しかし5区の中継点では9秒差をつけ、そのまま差を広げて3時間35分36秒で8連勝のテープを切った。Bチームもオープン参加ではあったが、Aチームに遅れること49秒差で総合2位、Cチームも総合4位と選手層の厚さを見せつけた。

本学陸上競技部の連勝記録は、当分続きそうな勢いである。

全日本大学駅伝15位

中国四国学生駅伝競走大会で8連勝を飾った本学陸上競技部は、昭和63年1月17日秩父宮賜杯第19回全日本大学駅伝対校選手権大会に代表として出場した。

大学日本一を競うレースは、好天に恵まれた午前8時スタート。名古屋市の熱田神宮西門から三重県伊勢市の伊勢神宮間をひた走る7区間一〇八、九キロメートルのコースを全国各ブロックより精鋭20校が参加して行なわれた。

徳山大学チームは、中国四国学生駅伝で活躍した塩屋孝久選手をはじめとして、皆よく健闘し、5時間49分30秒（過去2番目の記録）15位の成績でゴールした。

来年度はぜひ10位入賞を果し、伊勢路に徳山大学旋風を巻き起こしてくれることを期待したい。

■ゴルフ部

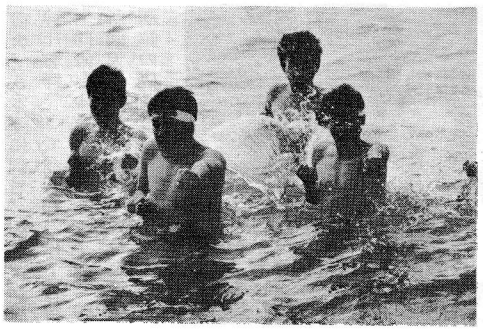
昨年度、中四国学生ゴルフ一部校対抗戦（団体戦）が、広島の賀茂C・Cで開かれ、我がゴルフ部は、2位の松山商大に28打の大差をつけ初優勝した。今まで、万年2位の徳大と云われていただけに、優勝決定の瞬間、選手一人一人の目に涙があふれていたのをよく覚えている。創部12年、先輩達の果せなかった夢が、辛かった炎天下での練習や球拾い等が、走馬灯のごとく選手の頭をよみがえらせた事と思う。

11月12日石川県片山津C・Cで開かれる第32回信夫杯争奪全日本大学対抗ゴルフ競技会（団体戦）続いて、第34回朝日杯争奪全日本学生ゴルフ選手権（個人戦：一年河野裕之出場）に、中四国を代表して出場する事となった。

全国大会は、各地区の代表16校が出場。我がゴルフ部は、初出場と云えど、チーム・ワークも良く、技量的にも安定し、部のムードは最高潮に達していた。したがって、日大・専修大・近畿大・同志社大等の名だたる強豪チームを除けば、ベスト10入りは困難ではなかった。試合が開始された。我がゴルフ部も6人のレギュラーが、アウト・インに分かれてスタートした。結果は、14位と振わなかったが、7位以下は1打差位いで続いており、我がチームもベストを尽くす事ができ、悔いのない試合内容であった。この大会で得たものは、ゴルフに関する事ばかりではなく、大学生活の中で最も貴重な体験になったことであろう。ここで、ぜひ紹介しておきたいのは、現4年生の10人の部員が、入部して4年間、1人の落ちこぼれもなく、一生懸命に部活動に励み、先輩を尊敬しまた、後輩の面倒をよく見てくれた事が、全日本出場を果したのである。私は部員全員に、部活動や学生生活を通じて、3年生の終りまでには、自分の進路を自分で決める事ができれば、立派な大卒の値うちがあると言っている。この10人は、それに値いする連中である。また、私はゴルフ部が他のどのクラブにも負けない、良いクラブだと自負し、誇りに思っている。終りに日頃から絶大なる声援を受けている中須ゴルフ場やグリーンゴルフガーデンに感謝し、そして、校友会諸氏の今後一層のご活躍を心ら祈念いたします。

『寒　行』

厳寒の白波寄する国立公園虹ヶ浜で、とっぷり体をつけての荒業である。総勢80名は、武道系クラブ員を中心とした猛者である。年の始めのみそぎとし、各全日本大会での勝利を瀬戸内海に誓う。



海は厳しくもやさしいふところで、徳山大、クラブ活動学生をつつんで、ほほえんでくれた。後の学生自炊の豚汁、この味は勝利の美酒にも似て、参加学生を暖めてくれた。時は正月中の頃、吉例の文化体育連合会のイベントだ。

交通安全キャンペーン

昨年6月末明、本学の学生4名が交通事故によって亡くなったことは、新聞などを通じてOB諸氏にも周知のことだと思われる。

このことを契機に本校は、交通安全に対する意識を一層深め交通安全の絶無を期して、全学をあげて交通安全運動を展開した。

まず、夏季長期休暇前に学生会交通安全委員会主催の交通安全講習会を開いた。次いで、9月に入って市内交通事故現場2ヶ所に献花を行ない、それぞれの場所で交通安全宣言文を読み上げた。9月26日には、久米の山久運輸前において約100名の学生によって交通安全Tシャツ（校友会オリジナルプリント）安全帽、徳大腕章、メガホンといういでたちで交通安全キャンペーンを行なった。

さらに翌日には、徳山自動車学校においてバイクの実技講習を実施した。現在、大学にバイクで通学するものは約800名いるが、そのうち160名が初心に帰り真剣に講習を受けた。

このキャンペーンに参加した学生300名が核となって口伝えで全学生に交通安全を呼びかけていけば、交通事故撲滅の日も決して遠い道程ではないだろう。

昭和62年度学業成績優秀者及び文化体育活動表彰について

◎学業成績優秀者

4年	E14-168	城田	和彦
	M14-102	仁谷	剛志
3年	E15-119	河原	正明
	M15-011	出川	博章
2年	E16-397	横谷	勇治
	M16-009	池田	浩
	M16-089	坪倉	利男

◎文化体育活動表彰者

最優秀賞

（団　体）

氏名・サークル	内　容
陸上競技部	第34回中・四国学生駅伝8連覇優勝

（個　人）

氏名・サークル	内　容
レスリング部 横谷　豊（2年）	全日本学生レスリング選手権大会 130kg級　4位
レスリング部 末　雄次（1年）	内閣総理大臣杯 130kg級　4位

優秀賞

（団　体）

氏名・サークル	内　容
ボクシング部	中国大学アマチュアボクシング大会　優勝

（個　人）

氏名・サークル	内　容
剣道部 窪田泰之（4年）	第34回中・四国学生剣道選手権大会　優勝
硬式野球部 木村雅浩（3年）	中国六大学野球春季リーグ戦 最高殊勲選手賞・ベストナイン受賞（投手）
硬式野球部 金本伸顕（1年）	中国六大学野球春季リーグ戦 ベストナイン受賞（捕手）
硬式野球部 柑子木裕二（1年）	中国六大学野球春季リーグ戦 ベストナイン受賞（一塁手）
硬式野球部 浜屋光慶（2年）	中国六大学野球春季リーグ戦 ベストナイン受賞（三塁手）
硬式野球部 福永聖治（2年）	中国六大学野球春・秋リーグ戦 首位打者賞（秋）ベストナイン春・秋受賞（二塁手）
硬式野球部 最上貴美（4年）	中国六大学野球春・秋リーグ戦 ベストナイン春・秋受賞（外野手）
硬式野球部 梶原礼士（1年）	中国地区大学野球新人戦 最優秀選手受賞
ゴルフ部 吉岡浩志（4年）	中・四国学生ゴルフ選手権大会 優勝
ゴルフ部 河野裕之（2年）	第5回中・四国学生ゴルフ会長杯争奪戦　優勝
柔道部 井口喜友（3年）	第6回中・四国学生柔道体重別選手権大会　95kg以下級　優勝
柔道部 寺井正昭（2年）	第6回中・四国学生柔道体重別選手権大会　86kg以下級　優勝
軟式野球部 森安哲也（3年）	西日本軟式野球春・秋リーグ戦 ベストナイン受賞（春）・最優秀投手賞受賞（秋）
軟式野球部 亀井伸也（3年）	西日本軟式野球秋季リーグ戦 ベストナイン受賞（一塁手）
軟式野球部 安芸和弘（2年）	西日本軟式野球秋季リーグ戦 ベストナイン受賞（外野手）
ボクシング部 松尾晴之（4年）	第14回中国大学アマチュアボクシング選手権大会　L・F級　優勝
ボクシング部 河野昭二（4年）	第14回中国大学アマチュアボクシング選手権大会　B級　優勝
ボクシング部 永井雅文（4年）	第14回中国大学アマチュアボクシング選手権大会　W級　優勝
ボクシング部 草地　亮（2年）	中国大学新人アマチュアボクシング選手権大会　F級　優勝
ボクシング部 大鹿裕史（2年）	中国大学新人アマチュアボクシング選手権大会　B級　優勝 最優秀選手賞受賞
ボクシング部 木下智夫（2年）	中国大学新人アマチュアボクシング選手権大会　L級　優勝
陸上競技部 丸上直人（4年）	中・四国Ⅰ・C（インター・カレッジ） 100m　優勝
陸上競技部 久保浩一郎（4年）	中・四国Ⅰ・C 3000mS・C（障害走）　優勝
陸上競技部 丸上・松原・田中・加藤	中・四国Ⅰ・C 4×100mR（リレー）　優勝
陸上競技部 坂口哲也（2年）	中・四国Ⅰ・C、中・四国学生選手権大会 ハンマー投げ　優勝
陸上競技部 田中秀明（4年）	中・四国学生選手権大会 100m　優勝
陸上競技部 岸本康宏（2年）	中・四国学生選手権大会 110mH（ハードル）　優勝
陸上競技部 宇治稔永（3年）	中・四国学生選手権大会 400mH　優勝
陸上競技部 芳賀・局田・田中・加藤	中・四国学生選手権大会 4×100mR　優勝
レスリング部 山根宣夫（1年）	西日本レスリング新人戦 48kg級　優勝
レスリング部 嶋　也幸（1年）	西日本レスリング新人戦 57kg級　優勝
レスリング部 小島直人（4年）	西日本学生レスリング選手権大会 62kg級（グレコローマン・フリースタイル）　優勝
写真部 大木忠彦（4年）	日本フォトコンテスト・フォトコンスクールビギナーの部 特選受賞

特別賞

（個　人）

氏名・サークル	内　容
柔道部 斉藤美洋（1年）	昭和62年沖縄海邦国体出場
レスリング部 山根宣夫（1年）	昭和62年沖縄海邦国体出場
レスリング部 多田昌弘（3年）	昭和62年沖縄海邦国体出場
レスリング部 末　雄次（1年）	昭和62年沖縄海邦国体出場
自転車同好会 都　和良（1年）	昭和62年沖縄海邦国体出場
権代浩之（4年）	優良青少年として山口県顕彰を受賞